収穫作業が終わったら来年に向けてケイ酸資材の秋散布と稲わらのすき込みによる土づくりを実施しましょう。

●ケイ酸資材の秋散布と稲わらのすき込み

管内の水田の７割はケイ酸不足となっています。稲はケイ酸植物ともいわれ、作物の中では最も多くケイ酸を吸収します。ケイ酸を多く吸収した稲は、稲体が直立し受光体勢が良くなり根が活性化します。そのため養水分の吸収が良くなり、高温や低温、長雨などの気象変動に強くなり、登熟を向上させ高品質・多収につながります。また、葉が硬くなることによりいもち病等の被害を軽減することができます。

皆様にお勧めするケイ酸資材は流防が少なく、秋にケイ酸資材を散布しても次年度に利用される資材です。春先は育苗作業や天候不順などで作業が遅れがちになります。春作業を余裕を持って行うためにもケイ酸資材（おばこロマン大地、ケイ酸加里）の秋散布を行いましょう。

秋散布と同時に稲わらを浅くすき込むことにより、冬期間に稲わらの腐熟が進み、代かき後の浮きわらが減少します。また、「わき」が抑えられることにより、活着・分げつが促進され、早期に茎数が確保しやすくなります。

成　分	ケイ酸17%、リン酸3%
散布量	40～60kg／10ａ
特　徴	ケイサンエースを配合しているので利用率が高い、機械散布に適した300kgフレコン有

成　分	ケイ酸34%、カリ20%
散布量	40～60kg／10ａ
特　徴	く溶性加里と流防しにくいケイ酸を配合

●稲わらの秋すき込みの方法

ケイ酸資材の散布・耕起は地温が低くならない10月中旬までに実施します。稲わらのすき込み耕深は５～10cm程度とします。畦畔際や枕地は畦塗をするため耕起しません。

●今年ノビエの発生に悩まされた方へ

今年ほ場にノビエが発生し種をこぼしてしまった場合、来年もノビエの発生が確実です。対策として石灰窒素をおすすめします（50kg／10ａ程）。石灰窒素を散布することによりノビエの種子の発芽を促し、冬期間の寒さを利用し枯死させることができます。

また、石灰窒素を秋に散布すると肥料成分が次年度に持ち越されるため、来年の基肥を20％ほど減肥することができます。

●ラウンドアップマックスロードの秋散布について

稲刈り後、ラウンドアップマックスロードを畦畔に散布することにより翌年の春作業中の草刈りを省略することができ、余裕を持って作業を行うことができます。

その他として、野ネズミの住処が無くなるため、ネズミ穴からの漏水防止による除草剤の効果が向上します。また、斑点米カメムシ類が好む雑草が無くなるため斑点米の発生を抑えることができます。

ラウンドアップマックスロードは稲刈り後10月下旬までに散布を行います。散布倍率は50～100倍としますが多年生雑草が多い場合が50倍で散布します。雑草の葉が緑色であれば秋の低温時でも安定した効果を発揮します。

No.6

農業技術情報

安心のネットワーク NOSAI

平成29年9月発行

発行：秋田おばこ農業協同組合／秋田県農業共済組合仙北支所

監修：仙北地域振興局農林部農業振興普及課

刈取適期は圃場を確認し総合的な判断で実施

乾燥・調製・出荷まで適正な水分管理で良食味米生産

●生育状況　仙北地域振興局農林部農業振興普及課より

定点ほ場の出穂期の平均は８月７日（平年８月３日）、管内全体の出穂期も８月７日（平年８月３日）で平年より遅くなっています。田植日や地域による出穂期の差が見られます。

８月21日現在の「あきたこまち」の生育は、穂数は419本／㎡（平年比95％）、葉数は12.7葉（平年差－0.1葉）でした。着粒数（３株調査）は34.7千粒（平年比108％）と多くなっています。７月22、23日の大雨で冠水した定点ほ場では籾の退化による着粒数の減少が見られています。

●出穂期別積算気温到達予想日

９月４日現在

アメダス地点		出穂日				
		８月７日	８月11日	８月15日	８月19日	８月23日
大曲	950℃到達日	９月18日	９月24日	９月30日	10月６日	10月13日
	1,050℃到達日	９月24日	９月30日	10月６日	10月13日	10月21日
角館	950℃到達日	９月19日	９月24日	９月30日	10月７日	10月14日
	1,050℃到達日	９月24日	９月30日	10月７日	10月14日	10月22日
田沢湖	950℃到達日	９月22日	９月27日	10月４日	10月10日	10月18日
	1,050℃到達日	９月28日	10月４日	10月11日	10月18日	10月28日

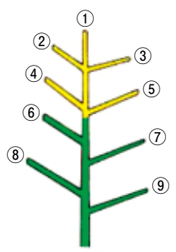
出穂日以降、好天が続かず、刈取り適期は平年と比べて４日～１週間程度遅れると予想されています。５月中旬の田植圃場は順調に登熟していますが、５月下旬田植圃場は出穂が遅れ、７号分げつまで穂数としていることから１株内の穂揃いもバラつきが見られます。

刈取時期は以下の判定法を組み合わせ総合的に判断しましょう。

刈取りの注意点	適期に刈り取らないと青米や胴割米の増加につながりますので、適期刈取りに努めましょう。
	○早生種（あきたこまち）…… 出穂後45日頃　出穂後積算気温950℃～1,050℃ ※積算気温1,100℃を超えると胴割粒が増加する。
	○中晩生種（ゆめおばこ・めんこいな）… 出穂後50日頃　出穂後積算気温1,050℃～1,150℃ ※積算気温1,200℃を超えると胴割粒が増加する。

刈取り判断の目安

刈取適期の籾の熟色



刈取適期の枝梗黄化程度

１）籾の熟色通常年では葉や穂首が緑色であっても、籾の黄化程度が90％（黄白＋黄色）の頃が適期となります。

２）枝梗の黄化程度上から５番目の枝梗まで黄化した頃、ただし、低温年は枝梗の黄化が遅れることから注意しましょう。

●籾摺・米選別作業

籾摺り作業では肌ずれ米や籾の混入を減らし、米選作業では被害粒や未熟粒を除去し、全量１等米の生産を目指します！

籾摺り作業の注意点

・籾摺機を水平に据え付け、主軸の回転数を確認の上でロールの間隔を１回通して脱ぷ率80～85％になるように試し摺して調整します。
・登熟不良で未熟粒が多い場合、無理にロール間隔をせばめないこと。ロール間隔は標準にして脱ぷ部に詰まりを生じない程度に籾の供給量を調節します。

米選作業の注意点

・被害粒・死米・未熟米などの不良粒をより多く除去して整粒歩合を高める最終作業ですので、能率重視は禁物です。
・高品質米に仕上げるために1.90㎜のフルイ目を推奨していますが、玄米流量を多くしての作業は効果が半減しますので、能力にあわせた作業を行いましょう。

●コンタミ（異品種混入）対策

異品種混入はＪＡＳ法違反です!!

・店頭で販売されている玄米（精米）は生鮮食品に分類され、名称、原料玄米（産地・品種・産年・使用割合）、内容量、精米年月日、販売者の表示が必要となります。
・製品に異品種が混入した場合はＪＡＳ法違反に問われます。

ＪＡＳ法で定められた表示（例）

名称	精米			
原料玄米	産地	品種	産年	使用割合
	複数原料米			
	国内産			10割
	○○県	○○ヒカリ	○○年産	8割
	未検査米			2割
内容量	○kg			
精米年月日	○○.○○.○○			
販売者	株式会社○○食糧 ○○県○○市 ○－○ 電話○○○（○○○）○○○○			

名称	精米		
原料玄米	産地	品種	産年
	単一原料米		
	○○県	○○ヒカリ	○○年産
内容量	○kg		
精米年月日	○○.○○.○○		
販売者	株式会社○○食糧 ○○県○○市 ○－○ 電話○○○（○○○）○○○○		

◎特に、複数品種を作付けしている生産者は刈取・乾燥・選別時は作業機械の清掃を徹底し、品種の混合に細心の注意を払います!!

◎集荷規格 …… 仕上げ水分目標15.0％から14.5％、量目（紙袋）は皆掛重量30.5kg

１．高品質米の区分

整粒歩合80％以上の「１等Ａ米」と、整粒歩合80％以上かつ玄米のタンパク質6.2以下の「１等Ｓ米」の２種類に仕分けします。

２．対象品種

あきたこまち、ゆめおばこ、めんこいな、ひとめぼれ、ササニシキ、淡雪こまち、秋のきらめき、つぶぞろいの８品種

農作業事故を無くしましょう!! ～自脱コンバインに関する安全対策のポイント～

① 後進時は、より慎重に運転しましょう！

コンバインの事故で最も多いのが転落・転倒事故です。特に、後進時に事故が多く発生する傾向があります！

左の写真のようにコンバインの後方は死角が多く、特に後進時に注意が必要です。
○畦畝や路面の凹凸等による転倒・転落事故に十分注意しましょう。
○補助作業者は、コンバインの死角での作業に十分注意しましょう。

② 納屋等からの出入り時は十分注意しましょう！

コンバインの挟まれ事故は、納屋等からの出入り時に梁と挟まれることによっても多く発生しています！

左の図のように納屋等の狭い場所でコンバインを動かす際は声かけ・合図を励行しましょう。

③ 巻込まれによる負傷事故に注意しましょう！

コンバイン巻込まれ事故は点検整備・清掃中に多く発生しています！そのうち、エンジン非停止が事故要因となるケースが多い状況です。

点検整備・清掃作業ではエンジンを停止しましょう。
手こぎ作業時は、適切な服装で機体の内側に手を入れないようにしましょう。

点検整備・清掃時…

手こぎ作業時…

毎年、農作業中の事故により、約400人が亡くなっています。安全な作業を心がけましょう!!

●収穫に向けて

シーズン前に作業機械の点検を必ず行いましょう。

◎機械収穫作業の注意点

・収穫時の籾水分は25％以下が望ましく、収穫時刻は稲体が乾燥している午前10時～午後5時頃を目安にします。
・刈取り品種が変わる場合にはコンタミ（異品種混合）を避けるため、籾搬送オーガ等の清掃を徹底しましょう。
・シーズン中は各部の点検やチェーン等への注油を怠らないようにしましょう。
・作業中のトラブルに際しては、作業事故防止のため、必ずエンジンを止めてから点検作業に入るようにしましょう。
・雨天の直後や早朝の収穫は穀粒損失やコンバインの詰まりの原因となるので避けましょう。

●刈取り前に作業機の点検を行いましょう。

◎コンバイン		◎籾　摺　機	
・刈刃にガタ・刃こぼれがありませんか	□	・籾殻は確実に排出されますか	□
・バインダーは確実に作動しますか	□	・ロールの摩耗はありませんか	□
・オーガ、昇降機にゴミがありませんか	□	◎選　別　機	
・クローラーの張りは適正ですか	□	・くず米に整粒は入っていませんか	□
・チェーン・ベルト類は緩みがありませんか	□	・選粒アミに穴あきは無いですか	□
・油圧装置などの注油はしていますか	□	・計量器の重量測定は確実ですか	□

●乾燥作業

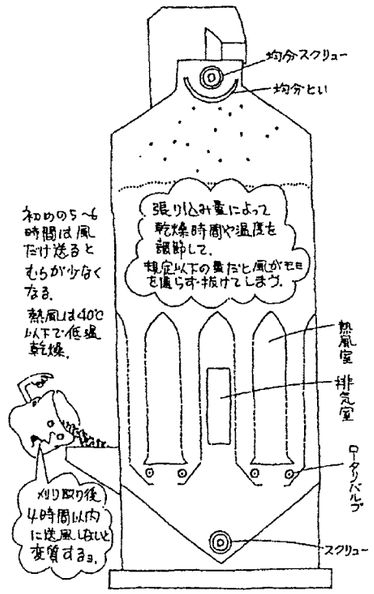
高水分籾の高温乾燥は食味低下を招きます!!

１．美味しさの決め手は「低温二段乾燥」です!!

一般に高温で火力乾燥すると食味が低下しやすくなります。これは、お米にふくまれる脂肪の分解が始まって、貯蔵中の食味低下を招くためですが、高水分籾ほど低温で乾燥する必要があります。

《低温二段乾燥法》

乾　燥　開　始
▼
ゆっくり乾燥（毎時乾減率0.7～0.8％）
▼
水分18～20％で乾燥は休止
▼
8～12時間火をとめて放置
▼
仕　上　げ　乾　燥
水分15.0％以下（目標仕上げ水分14.5％）をめどに
▼
完全に放冷した後、調製作業に入る



２．乾燥作業は気温と加熱温度のバランスの調節が大切です

・乾燥機での乾燥は気温の高さや湿度によって、仕上がりが変わります。一般に、早生品種（あきたこまち）は胴割れが発生しやすいため、先の低温二段乾燥を絡めてゆっくりと乾燥させることが大切です。
・青米混入の多少によって、仕上がり水分の変化があることも考慮します。
加熱乾燥が終了してから、放冷中に乾燥が進んだり、戻ったりします。これは保管中の建物・乾燥機の特性等の影響もありますが、最も与える影響の大きいものは乾燥籾に含まれている青米の混入率です。

《青米の混入と乾燥の進み方》

玄米100粒中の青米混入数	乾燥終了後の水分変化	乾燥停止設定玄米水分	乾燥終了水分値
11粒以上の時	乾燥が戻る（水分率が上がる）	14.5％	15.0％
6～10粒の時	水分変化が少ない	15.0～14.8％	15.0％
0～5粒の時	乾燥が進む（水分率が下がる）	15.5～15.3％	15.0％

◎乾燥機の水分計に任せず、正確な水分計を使用し水分を測ること!!